



TITLE:

最近の図書館研究の状況：批判的図書館(史)研究を中心として

AUTHOR(S):

川崎, 良孝

CITATION:

川崎, 良孝. 最近の図書館研究の状況：批判的図書館(史)研究を中心として. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 2009, 8: 1-10

ISSUE DATE:

2009-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/71628>

RIGHT:

最近の図書館研究の状況

－批判的図書館（史）研究を中心として－

川崎 良孝

Library History Research in the United States: An Overview

Yoshitaka KAWASAKI

1 はじめに

京都大学の川崎です。志保田務先生のこうした記念すべき場で発表させていただき、非常に光栄です。

最近の図書館を取り巻く状況は、例えば構造的転換といわれたりしますが、非常に大きく変化しています。僕はそうした転換なり変化を理解したいと思っています。その場合、すなわち過去の総体を背負っている現在の理解に際して、時間や空間を離れたところから分析するのは、そうした理解を深めるものとして、非常に有効な方法であると思います。それは現在の状況を肯定するにしろ、批判するにしろ、さらには切り捨てるにしろ、有効な方法として機能するでしょう。

早くも1978年にF.W.ランカスター (F.W. Lancaster) は『紙なし情報システム』(原著: 1978; 植村俊亮訳, 共立出版, 1984) で、紙なし社会への移行を主張し、活字資料の蓄積の場としての図書館の終焉を示しました。また1992年にB.パークは「司書職の消滅は直接的かつ明瞭には生じないものの、周縁化と呼ばれる過程を通して生じる」(Bruce Park, "Libraries Without Walls: Or, Librarians Without a Profession," *American Libraries*, October 1992, 746) と述べています。そして1993年にM.ハリスとS.ハナは1970年代から1990年代初頭までの文献を展望して、図書館関係文献では「危機が支配的メタファー」であると分析しました (Michael Harris and Stan Hannah, *Into the Future: The Foundations of Library and Information Services in the Post-Industrial Era*, Norwood, N.J., Ablex, 1993)。当然ながら情報化の時代を図書館にとっての機会と把握する論も多く存在します。しかし、そうした論も含めて、図書館をめぐる危機感はインターネットの時代になって、いっそう高まってきたといえます。例えば1990年代中頃から大学図書館界を中心に、「アクセス対ホールディング」という議論があります。これは資料や情報へのアクセスを保障すべきであるが、建物としての図書館は不必要という主張をめぐる議論です。この議論には物理的図書館の将来にたいする不安や懸念が窺われます。このように、メディアの多様化、および技術の進展によって、図書館自体の存在、さらには役割をめぐる種々の主張、論議、実践が行われてきました。

こうした状況を理解するについて、もちろん最新の文献も読むわけですが、歴史的に似た時代がなかったかと思いをめぐらします。もちろん印刷術の発明の時代に戻ってもいいのですが、よく似た時代は戦後直後のアメリカ図書館界を取り巻く状況にあるのではないかと考えたわけ

です。すなわち、公立図書館ではいわゆるペーパーバックが出現し、そうした安価本が現在でいうキオスクのようなところでどんどん発売されるようになります。またテレビやラジオが広まり、公立図書館はそれらを取り込もうとしました（少し時代は異なるが以下を参照。吉田右子『メディアとしての図書館：アメリカ公共図書館論の展開』日本図書館協会，2004）。大学図書館ではマイクロの形態が出現し、建物としての図書館の重要性に疑問が提起されたりします。ここでもメディアの多様化と技術の革新、それにもとづく図書館の位置と役割について活発な議論がされています。そうした議論は戦後の大きなプロジェクトである公立図書館調査（Public Library Inquiry）とその提言をめぐる論議に結晶化されているのです。なお、公立図書館調査に関してはD.レイバー（Douglas Raber）『司書職と正当性：公立図書館調査（Public Library Inquiry）のイデオロギー』（原著：1997；川崎良孝訳，京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2007）が参考になります。

ところで、こうした2つの時代を比較すると面白いことがわかります。戦後直後の言説の土台になっているのは、政治でありデモクラシーでした。それに基づいて語句が使用されています。一方、現代の言説の土台になっているのは、経済や情報技術で、それに基づいて語句が使用されています。その場合、同じ「利用者」という語句が使われていても、実質的に意味する内容が相違する、すなわち語句の実態としての意味が変化しているということがわかります。こうしたことを分析していくのが、現状の「理解」にとって重要なことではないかと思っています。

以上を前置きに、今日は図書館の研究が時代とともにどのように変遷してきたのかということ、図書館史研究を例にとって報告したいと思います。時間の関係もあり、過度な図式化になっていますが、ご了解ください。

2. 第1世代（1850-1930年）の図書館史記述：素朴な事実史の記述

全体を図に示しておきましたので、ご覧ください（図は省略）。一番上に年代と時代状況を示してあります。その下に矢印付の細線で横の方に3本の線がでています。これはおのこの歴史学、教育史学、図書館史学の変遷を示しています。一方、縦の斜線がありますが、これはタイムラグを経て、歴史学研究が教育史学に変化を与え、教育史学がさらに図書館史学に影響を与えているということを示したものです。そして一番右の太線の斜線は、そうした従来の研究を受けて、新しい研究が最近になって生じていることを示しています。

さて、アメリカで最初のもともった図書館史の業績は、ハーヴァード大学長やボストン市長を歴任し、1807年に成立したボストン・アセニウム（Boston Athenaeum）の創立者の1人であるJ.クウィンシーの『ボストン・アセニアムの歴史：物故した設立者の伝記もまじえて』（Josiah Quincy, *The History of the Boston Athenaeum: with Biographical Notices of its Deceased Founders*, Cambridge, Mass., Metcalf and Co., 1851）です。1851年に刊行された本書はアセニウム創立から1850年までを扱い、(1)起源、進展、成功、(2)設立者や貢献者、(3)現在の繁栄を導いた重要な出来事を忠実に年代を追って記しています。こうしたクウィンシーの歴史記述の特徴は、記念誌型、回想型、アセニウム会員のアイデンティティの形成の

ための手段、客観的事実史、年代記、それに素朴な発展史という点に特徴があります。さらにこの第1世代の特徴は、1館史の寄せ集めとしてのいっそう広範な図書館史記述（例えば以下を参照。Horace Scudder, "Public Libraries A Hundred Years Ago," U.S. Bureau of Education, *Public Libraries in the United States of America, ..., Special Report*, Washington D.C., Government Printing Office, 1876, p. 1-37）、さらには進化論を適用した非歴史的な歴史記述にあるといえるでしょう（例えば以下を参照。Moses Coit Tyler, "The Historic Evolution of the Free Public Library in America and its Function," *Library Journal*, vol. 9, 1884, p. 40-47）。

3. 第2世代（1930-1973年）の図書館史記述：民主的解釈の登場

革新主義図書館史学とか、民主的解釈派といわれる図書館史研究者が登場する時代です。その代表的な研究者がJ.シェラ（Jesse H. Shera）とS.ディツィオン（Sidney Ditzion）です。これについては表をご覧ください（表は省略）。表にはシェラとディツィオンの業績について、基本的なことをまとめてあります。ここではシェラを取り上げましょう。1930年頃から、A.ボーデン（Arnold Borden）、P.バトラー（Pierce Butler）、J.ウェラード（James Wellard）、C.ジョッケル（Carlton Joeckel）、G.スペンサー（Gwladys Spencer）といったシカゴ大学図書館学大学院の研究者が、図書館史研究を図書館学の中で位置づけたり、部分的な図書館史を記述したり、スペンサーのようにシカゴ市立図書館を取り上げて精緻な図書館史の研究を行ったりします（Gwladys Spencer, *The Chicago Public Library: Origins and Backgrounds*, University of Chicago Press, 1943）。そうしたシカゴ学派図書館史学の到達点がシェラの『パブリック・ライブラリーの成立』（原著：1949；川崎良孝訳、日本図書館協会、1988）です。シェラの公立図書館の成立と発展に関する解釈は民主的解釈と呼ばれていますが、それは下からの運動と理解ある上からの支持者によって成立し発展した公立図書館は、アメリカの民主的性格を体現するものであるという解釈です。さらに2点を付け加えておきます。1つは、公立図書館を社会的機関（agency）と把握し、それは社会的制度（institution）に規定されると把握した点です。そのためシェラは公立図書館の成立と発展をもたらす「社会的要因」を抽出することに力を注ぎます。それらが表に示してある「経済力」、「学術・資料保存」、「地元の誇り」、「公教育」、「自己教育」、「職業的影響」にはかなりません。いま1つはニューイングランドと同じような社会状況（社会的要因）が揃った地では、公立図書館が成立、発展すると指摘し、解釈をいわば普遍的な一般図式に止揚させた点にあります。それはともかく、シェラの解釈はアメリカ公立図書館の成立と発展についての唯一の包括的解釈として君臨したのです。そののちの研究は、シェラやディツィオンの業績の各論を深めたり、特定の主題を設定して両者の解釈を確認したりしました。後者の代表としては、公立図書館での継続教育サービスに主題を限定して、通史としてまとめたR.リーの業績『アメリカ公立図書館における成人継続教育：1833-1964年』（Robert Lee, *Continuing Education for Adults through the American Public Library, 1833-1964*, Chicago, American Library Association, 1966）があります。

4. 第3世代(1973-1990年)の図書館史記述：修正解釈の登場

表をご覧いただきたいのですが、1973年にM.ハリスがポピュラーな『ライブラリー・ジャーナル』に発表した衝撃的な論文「アメリカ公立図書館の目的：修正解釈派の歴史解釈」が、第3世代の幕開けになりました(Michael H. Harris, "The Purpose of American Public Library: A Revisionist Interpretation of History," *Library Journal*, vol. 98, 1973, p. 2509-2514)。この論文でハリスは教育史学研究での修正解釈派の解釈を援用して、刺激的な解釈を発表しました。その解釈は明快で、アメリカ公立図書館の成立と発展に関して、公立図書館に担われた基本的な目的は社会統制、社会秩序の維持にあるという解釈です。それを仮説的一般図式として提出したのです。この社会統制理論の系列に属する初期のまとまった図書館史記述としては、R.ドゥモントの業績があります。この1977年に刊行された図書は19世紀末から20世紀初頭のアメリカ大都市公立図書館を取り上げて、基本的にハリスの解釈を土台とした業績です(Rosemary Ruhig Du Mont, *Reform and Reaction: The Big City Public Library in American Life*, Westport, Conn., Greenwood Press, 1977)。

表にはもう1人の修正解釈派の業績として、D.ギャリソン(Dee Garrison)の『文化の使徒：公共図書館・女性・アメリカ社会, 1876-1920年』(原著：1979；田口瑛子訳, 日本図書館研究会, 1996)があります。ギャリソンは歴史学の研究者で図書館学から入った人ではありません。本書は、第1部「宣教師の時代」、第2部「道徳論争の推移」、第3部「メルヴィル・デュイ」、第4部「優しい技能要員」の4部構成になっています。第1部は図書館指導者のプロフィールをグループとして浮かび上がらせるとともに、ハリスの解釈を補強しています。第2部はフィクション問題、第3部は図書館の使命と技術をデュイを取り上げて解明し、第4部「優しい技能要員」は司書職の女性化(feminization)を扱っています。実はこの第4部が2つの意味で重要です。ここで初めて、図書館や図書館史の研究に女性が入ってきたのです。20世紀初頭のアメリカ公立図書館の図書館員は80パーセント近くが女性でしたが、それを図書館史研究はまったく無視してきたわけです。その後の研究では女性を看過できなくなりました。その点では、僕の『図書館の歴史：アメリカ編』(日本図書館協会, 1989, 1995, 2003)には、大きな欠陥があったと認めざるを得ません。いま1つ重要なことは、ギャリソンが「女性が多いがために司書職は専門職になれなかった」という結論を導いた点です。この結論はとりわけフェミニストの女性図書館史研究者から厳しい批判を受けるとともに、女性が図書館史に果たした積極的な側面を掘り起こしていくという大きな研究領域がでてきます。この種の研究は現在でも精力的に行われています。代表的業績として、S.ヒルデンブランド(Suzanne Hildenbrand)編著『アメリカ図書館史に女性を書きこむ』(原著：1996；田口瑛子訳, 京都大学図書館情報学研究学会発行, 日本図書館協会発売, 2002)、さらにはJ.パセット(Joanne Passet)の『アメリカ西部の女性図書館員：文化の十字軍、1900-1917年』(原著：1994；宮崎真紀子・田口瑛子訳, 京都大学図書館情報学研究学会発行, 日本図書館協会発売, 2004)があります。それとともに、ギャリソンの捉え方の是非はともかく、司書職の専門職論を検討する場合にギャリソンの解釈は常に取り上げられるようになりました。

このようにハリスとギャリソンの歴史研究は、単に図書館史研究だけでなく、現代の図書館

や専門職論を考える場合に、重要な視点と解釈を提供したのです。第3世代の登場によって、アメリカ公立図書館の成立と発展に2つの解釈が出現したことになります。1つの例を挙げましょう。例えばジャスティン・ウィンザーがボストン公立図書館長の時代（1868-1877）に、ボストンは積極的に分館設置に乗り出します。アメリカ最初の分館イースト・ボストン分館（1871）を皮切りに、サウス・ボストン分館（1872）、ロックスバリー分館（1873）、さらにチャールスタウン、ブライトン（1874）、ドーチェスター（1875）、サウス・エンド、ジャマイカ・ブレイン（1877）という具合で、いずれも固定施設、専任職員、固有の蔵書を有する分館です。こうした分館設置の意味について、第2世代の民主的解釈の場合、労働者階級を意識したまさに民主的な取り組みを具体的に体现したということになります。一方、第3世代の修正解釈の場合、イースト・ボストンやサウス・ボストンといった湾岸の工場地帯への設置は、社会統制、社会秩序の維持を目的に設置されたということになるでしょう。平たく言うと、居酒屋や賭け事にかかわる労働者が、少しでも分館を利用してくれればよい。そのために、害のないフィクションをむしろ積極的に提供し、夜間開館も実施しなくてはならないと論は展開するわけです。1890年代に盛んになる、大都市での分館設置、開架制の導入、ストーリーテリングの開始なども、2つの解釈で説明できるでしょう。

5. 第4世代（1990年-）の図書館史記述：多様化する図書館史研究

5.1 第4世代（1990年-）の図書館史記述：背景

第4世代の研究を1990年からと設定しましたが、これは漠然と設定したもので、これまでの3つの世代の時代区分ほど明瞭ではありません。というより、僕としてまだ明確に時代区分ができていないということです。この時期の図書館史研究を導く背景をごく簡単に指摘しておきます。

(1)教育の研究や教育史学では教育史における修正解釈派の捉え方を乗り越える形で、M.アップル（Michael Apple）やH.ジルー（Henry Giroux）といった研究者がでてきます。こうした研究者は必ずしも教育史研究者プロパーとはいえませんが、不平等と教育とのかかわりに関係性の分析（relational analysis）によって解明しようとしていました。また一定の価値の密かな教え込みを暴いていくという関心を持っています。いずれも階級、ジェンダー、人種がキーワードになります。単に公教育や学校を民主的とか社会統制の場と一面的に解釈するのではなく、実際の教室やカリキュラムのなかで働いている顕在的、潜在的な複雑な作用を解明していくという方向です（例えば以下を参照。M.アップル『オフィシャル・ノレッジ批判：保守復権の時代における民主主義教育』原著：1993；野崎与志子ほか訳，東信堂，2007；Henry Giroux, "Theories of Reproduction and Resistance in the New Sociology of Education: Critical Analysis," *Harvard Educational Review*, vol. 53, 1983, p. 257-293)。

(2)既述の「アクセス対ホールディング」の論議では、物理的図書館をめぐる種々の意見がだされました。これは図書館という場への関心を高めることになりました。これに関して、多くの重要な業績が視野に入ってきます。例えば、J.ハーバーマスの『公共性の構造転換』（原著：1962；細谷貞雄訳，未来社，1973）です。ハーバーマスの市民的公共性の概念は、近

代国家から市民社会が分離するとともに成立したとされる歴史的概念であり、市民がカフェや新聞などを通じて公論形成の場で批判的な論争を行い、公論を形成していくような公共的関心のあり方をいいます。ハーバーマスはここに近代民主主義の基礎を見出しましたが、同時に市民的公共性の解体をも指摘したのです。そうした公共性（圏）の場として、図書館を把握する研究が散見されるようになりました。ハーバーマスの公共圏に図書館を位置づけるとともに、新自由主義を批判したのがJ.ブッシュマンの業績『民主的な公共圏としての図書館：新公共哲学の時代に司書職を位置づけ持続させる』（原著：2003；川崎良孝訳，京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2007）です。さらに図書館、とりわけ公立図書館という場をどのように考察するかについて、示唆を与える重要でポピュラーな研究書がでています。例えば、R.パットナムの『孤独なボウリング』（原著：2000；柴内康文訳，柏書房，2006）は、パットナム自身が定義する「社会関係資本」（social capital）が20世紀の前半期から1960年頃にかけて増大し、その後、急速に減退していくことを示し（例えば、市民組織や専門職組織への参加人数の変遷などで証明する）、そうした社会関係資本の再生、コミュニティの再生を訴えています。また2003年に刊行されたパットナムとL.フェルドスタインの共著『いっしょによりよく』（Robert D. Putnam, Lewis M. Feldstein, *Better Together: Restoring the American Community*, New York, Simon & Schuster, 2003）では、特に第2章をシカゴ公立図書館のニアノース（Near North）分館の活動にあて、社会関係資本としての公立図書館の重要性を論じました。さらにR.オールデンバーグは『偉大な良き場』（Ray Oldenburg, *The Great Good Place*, New York, Marlowe & Company, 1989, 1997, 1999）で、第3の場（third place）という概念を提出しています。これは公的な場でもなく、私的な場でもない中間的な場で、具体的にはカフェ、パブ、コーヒーショップ、書店、バー、美容院など、多くの場をいいます。そしてオールデンバーグはこうした第3の場がコミュニティの構築にとって、非常に重要であると強調したのです。残念ながら、オールデンバーグは図書館を取り上げていませんが、こうしたハーバーマス、パットナム、オールデンバーグの著作は、図書館という場の歴史と現状を把握するに際して、豊かな洞察を与えてくれます。例えばJ.ブッシュマンとG.レッキーが編纂した『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』には、オールデンバーグの枠組みを適用した論文がいくつかあります（原著：2007；川崎良孝・久野和子・村上加代子訳，京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2008）。さらに現代の図書館の分析にも第3の場という枠組みが使われています（Gloria J. Leckie, Jeffrey Hopkins, "The Public Place of Central Libraries: Findings from Tronto and Vancouver," *Library Quarterly*, vol. 72, 2002, p. 326-372）。

(3)この時期にプリント・カルチャー、ブック・スタディーズ、リーディング・スタディーズなど言葉はさまざまですが、図書や活字、さらに読書に関する学際的な研究領域が急速に伸びてきました。プリント・カルチャーの研究や研究領域は非常に多様ですが、元をたどればアナール派や書物の歴史（*histoire du livre*）の研究に源を持ち、さらに英米での分析書誌学を加えたものといえます。この領域の主たる研究者であるR.ダントン（Robert Darnton）は、有名な「伝達サーキット」（communication circuit）という図を提示し、この研究分野の全

体像を示しました。ダントンは、人に注目し「作者」、「出版業者」、「印刷業者」、「書籍販売業者」、「読者」、そして「作者」と循環することを示し、同時にそれらに影響を与えるものとして、「経済状況と社会状況」を中心に、それと部分的に重なる形で「政治的承認と法的承認」および「知的影響と宣伝」を置いています（原著：1990；『歴史の白昼夢：フランス革命の18世紀』海保眞夫・坂本武訳、河出書房新社、1994。図は87頁）。例えば作者ですと、これまでテキスト批判ということで、文学者がテキストの研究をしてきました。しかしテキストの意味は読者によって多様であるとの考えが出現するとともに、そうした意味は物理的図書によって影響されることもわかってきました。そこで、これまではテキストの研究、出版業の研究、印刷の研究、読者の研究と個別に方法論も相違して研究されていたのですが、これを学際的、総合的に研究するという方向と研究領域が必要になってきたのです。訳書では「読者」の部分について、「読者：購買者、借り手、クラブ、貸本利用者」となっていますが、原書では"Readers: Purchasers, Borrowers, Clubs, Libraries"となっており、"Libraries"は「図書館」だろうと僕は思っています。ここで図書館史研究という観点からしますと、とりわけ公立図書館と読者（利用者）との関係を例えば貸出記録を活用することで、コミュニティの読書状況の解明に役立てることができます。例えば19世紀の小さな町の一般住民の読書傾向などを解明しようとするれば、こうした図書館記録は重要な手段になります。このように、急速に拡大するプリント・カルチャー史という研究分野で、図書館史研究の果たせる役割は大きいといえるでしょう。

プリント・カルチャー史への図書館史研究者の参画は、実は図書館情報学とりわけ図書館史研究が置かれている厳しい現実をも意識したものです。1980年代にシカゴ大学やコロンビア大学など、図書館情報学研究を先導してきた図書館学校が相次いで廃止されました。その理由の1つとして、図書館学校が当の大学内で孤立していたという事実があります。また図書館情報学大学院のカリキュラムが情報や情報技術に傾斜し、図書館史の研究者には危機感があります（これについては図書館史研究の将来の方向についての論争も関係する。例えば以下を参照。Donald G. Davis, Jr., Jon Arvid Aho, "Whither Library History? A Critical Essay on Black's Model for the Future of Library History, with Some Additional Options," *Library History*, vol. 17, 2001, p. 21-37）。1991年にSHARP (Society for the History of Authorship, Reading, and Publishing) が多くの図書館関係者も参加して設置されました。そして1998年には学術雑誌『図書の歴史』(*Book History*) を発刊するまでになりました。また1992年には、ウィスコンシン大学とウィスコンシン州歴史協会が合同して、プリント・カルチャーに関する研究センター (Center for the History of Print Culture in Modern America) を設置し、図書館情報学大学院の教員は設置に際して中核的な役割を果たしました。このように、プリント・カルチャーや広範な文化史、アメリカ研究への展開には、研究上の意味とともに、政治的な意味もあるのです。

5.2 第4世代(1990年-)の図書館史記述：特徴

この第4世代の図書館史記述の特徴を思いつくままにいくつか指摘したいと思います。ところで第2世代と第3世代の図書館史研究は、その解釈という点では正反対のように見えますが、次の2点では共通しています。

(1)第2世代と第3世代の解釈は、図書館の成立と発展の理解に一面的な枠組みを提供する結果になり、社会と図書館、図書館の内部、図書館と利用者のあいだでの深みのある分析を閉じる結果となっています。すなわち端的にいうと、折り合いをつける (negotiation) という側面を排除しており、それは研究が一種のデッドロックに乗り上げることを意味しています。

(2)いずれの解釈も、以下がキーワードになります。ボストン公立図書館、大都市公立図書館 (特に中央館)、男性のエリート館長や図書館指導者、白人中産階級、ニューイングランドを中心に中部大西洋岸、図書館側からの視点、活字文献資料中心の実証的研究、刊行された文献の重視。

このような共通点を持つ第2世代や第3世代の研究にたいして、第4世代の研究は次のような特徴を持ちますが、それらは上述した「背景」から多くの影響をうけています。順不同で列挙したいと思います。

(1)関係性の分析。

(2)図書館から利用者を捉えるのではなく、利用者の生活の中での図書館を考えるという視点 (the user in the life of the library → the library in the life of the user)。

(3)階級、ジェンダー、人種などへの問題意識の高まり。

(4)図書館や図書館史研究でいわば常識とされていることがらの再検討。

(5)重視されるキーワード：階級、ジェンダー、人種 (マイノリティ)、中西部・西部・南部、小規模図書館や分館、女性図書館員、一般の利用者、図書館利用者の生活の中での図書館、活字文献資料以外の重視 (建物や備品、オーラルヒストリー)、アーカイブ資料や第1次資料の重視、学際的研究や理論の適用。

(6)プリント・カルチャー、ブック・カルチャー、アメリカ文化史、アメリカ研究などへの展開。

5.3 第4世代 (1990年-) の図書館史記述：ウィーガンド

第4世代は一般図式を描くまでにいたっていません。いわば現在は全体化に向けての個別研究、各論研究の時期といえるでしょう。この第4世代を導いているのが以前はウィスコンシン大学、現在はフロリダ州立大学のW.ウィーガンド (Wayne A. Wiegand) です。非常に多くの単行書、雑誌論文を執筆していますが、包括的な図書館史解釈としては1999年の『ライブラリー・クォーターリー』 (*Library Quarterly*) に発表した「20世紀の図書館・図書館学を振り返る：狭い視野と盲点」があります (川崎良孝編著『図書館・図書館研究を考える：知的自由・歴史・アメリカ』京都大学図書館情報学研究会発行、日本図書館協会発売, 2001, p. 3-44)。この論文はウィーガンド自身の豊かな個別研究、各論研究を総合化するとともに、図書館史研究のあり方に問題提起を行っています。その骨子は以下のようです。アメリカの図書館は豊かな歴史を持ち多くの利用者を有する機関、それも全国に遍在する機関であるが、そうした機関のうちでは最も研究が看過されている。また、図書館情報学研究は図書館の研究にあたって表面的現象だけを追い、図書館サービスの深い意味を解明することは少なく、それに図書館情報学の中だけで完結している。こうした状況が生じている大きな理由の1つに、他の社会科学な

どで積極的に用いられている批判理論 (critical theory) などの適用にまったく無頓着という事実がある。そのためアメリカ図書館の歴史的あるいは現代的な役割を分析できないでおり、そのことが図書館の将来を構想する場合にも、大きな痛手になっている。

そしてウィーガンドは実際に、プリント・カルチャーやアメリカ研究に図書館研究を発展させるべく、精力的に活動し、多くの著作の編者になって他分野の研究者との学際的研究や学術的対話を続けています (例えば以下を参照。James P. Danky, Wayne A. Wiegand, eds., *Print Culture in a Diverse America*, University of Illinois Press, 1998; Thomas August and Wayne A. Wiegand, guest eds., "The Library as an Agency of Culture," *American Studies*, vol. 42, Fall 2001, entire issue)。

いま1人の研究者の業績を挙げておきます。ウィーガンドの指導を受けたC.ポーリー (Christine Pawley) の『中部辺境地域での読書』(*Reading on the Middle Border: The Culture of Print in Late-Nineteenth-Century Osage, Iowa*, University of Massachusetts Press, 2001. 博士論文としての提出は1996年) は、1870年から1900年にいたるアイオワ州オーセージでのプリント・カルチャーを扱った力作です。これは過去20年間に発達してきたプリント・カルチャー、ブック・カルチャーの研究を視野に入れたもので、特にロジェ・シャルチュエ『書物の秩序』(長谷川輝夫訳, ちくま学芸文庫, 1996) の「読者共同体」を意識し、それをオーセージというアメリカの小さな町をテストケースとして、解明したものです。したがって、単に図書館だけでなく、出版や新聞、学校や教会、自発的な団体などを取り上げ、かつ階級構造を明らかにしつつ、当地の読者共同体の再構成を意図した業績です。その図書館に直接かわる部分を取り出したのが「ビリヤードよりも良いもの：1890年から1895年のアイオワ州オーセージにおける読書と公共図書館」です (原著：1998；吉田右子訳『図書館・図書館研究を考える：知的自由・歴史・アメリカ』川崎良孝編著, *op.cit.*, p. 119-150)。この論文でのポーリーの研究方法は、センサスによる住民情報、図書館蔵書、図書館記録 (貸出記録、登録簿) の各データベースを作成して関連づけ、さらに住民や図書館利用者については、人名録、教会記録などを渉猟して確定し、利用者の所属や属性を解明することで、図書館利用と図書利用の実態を解明しています。また男性向け図書、女性向け図書、成人向け図書、子ども向け図書、「ハイ」カルチャーの図書、「ロウ」カルチャーの図書といった分け方が、住民の実際の読書においては、たいして意味がないといった分析結果を導きました。これらは従来の図書館や図書館史研究が前提としている常識にたいして、説得力のある疑問を突きつけたことになるでしょう。

6 おわりに

以上のような第4世代の研究について最後に1つだけ強調しておきたいと思います。図書館史プロパーの研究としては、ウィーガンド、ポーリーの他に、R.ロビンズ (Rouise Robbins)、T.セイメック (Toni Samek)、さらにT.オーグスト (Thomas Augst) などの研究と業績はこうした広範な動きを受けた問題意識に富んだ業績で、図書館史研究の質は向上しています (Robbins, *The Dismissal of Miss Ruth Brown: Civil Rights, Censorship, and the American Library*, University of Oklahoma Press, 2000; セイメック『図書館の目的をめ

ぐる路線論争：アメリカ図書館界における知的自由と社会的責任，1967-1974年』川崎良孝・森田千幸・村上加代子訳，京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2003；August, *The Clerk's Tale: Young Men and Moral Life in Nineteenth-Century America*, University of Chicago Press, 2003)。さらに建築史の方から図書館の外観、館内の空間、さらには備品や装飾に斬新な分析を加えたA.ヴァンスリック（Abigail Van Slyck）の業績『すべての人に無料の図書館：カーネギー図書館とアメリカ文化 1890-1920年』（川崎良孝・吉田右子・佐橋恭子訳，京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2005）があります。この本は従来の図書館史研究にはない、斬新な視点と方法を備えた研究書です。一方、5節の背景で示したような関心は当然ながら、現在の図書館や図書館情報学の分析にも用いられ、哲学や社会学の理論的枠組みを用いる研究論文が多くなってきました。例えば、既述のブッシュマンやレッキーの他にも、J.バッド（John Budd）、G.ラドフォード（Gary Radford）などがその代表です。特にバッドはヨーロッパの哲学や社会学の豊かな素養を背景に、図書館および図書館学の基盤について精力的な研究を続けています（Budd, *Knowledge and Knowing in Library and Information Science: A Philosophical Framework*, Lanham, Md., Scarecrow Press, 2001; Budd, *Self-examination: The Present and Future of Librarianship*, Westport, Conn., Libraries Unlimited, 2008; Radford, "Libraries, Librarians, and the Discourse of Fear," *Library Quarterly*, vol. 71, 2001, p. 299-329）。

僕が興味を持っている分野をみますと、最近のアメリカの研究はかなり質が上がっています。それとともに、以前の図書館史研究は研究の境界が明確でしたが、最近では学際的な方向に向かうとともに、現在の図書館現象に関する研究と融合しあうようになってきました。これは重要なことだと思います。

京都大学の授業で半期をかけて話すことを、今日は1時間に強引にまとめてみました。こういう機会を与えてくださったことに、あらためてお礼を述べ、発表を終わらせていただきます。

※本稿は桃山学院大学教授志保田務先生（本学教育学部非常勤講師）の退職記念会（2008年5月10日開催）での特別講演の講演録である。この記念会には120名以上の参加があった。